

第15回 厚木看護専門学校 教育課程編成委員会 議事録

日時：2023年3月16日(木)

16:30～17:20

場所：厚木看護専門学校 会議室

1 外部委員出席者（6人）

- (1) 三宅 正敬（厚木医師会 会長）
- (2) 北野 義和（厚木病院協会 副会長）
- (3) 吉村 由紀（神奈川県看護協会 県央支部長）
- (4) 伊藤 玲子（東名厚木病院 副院長兼看護部長）
- (5) 神保 京美（伊勢原協同病院 副院長兼看護部長）
- (6) 梅澤 広昭（神奈川県立厚木東高等学校 校長）

2 厚木看護専門学校教職員出席者（5人）

学校長 武藤和恵【委員長】、 副学校長 五十嵐一美【副委員長】、
看護学科長 島田真由美、 看護学科総括主査 持木香代、 総務課長 茂木憲明

3 議題等

- (1) 議題
 - ① 2022年度 カリキュラム評価について 資料1
 - ② 2022年度 卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価について
資料2
 - ③ 新カリキュラムによる授業・実習の状況について
- (2) その他
2023年度4月入学生からの「ダブルスクール制度」の導入について
- (3) 配付資料
 - ① 2022年度 カリキュラム評価について 資料1
 - ② 2022年度 卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価について
資料2
 - ③ 教育課程編成委員会名簿
 - ④ 教育課程編成委員会規程
 - ⑤ 座席表

4 内容等

【五十嵐副学校長】

配付資料の確認、外部委員紹介及び、当校教職員紹介を行った。

【武藤学校長あいさつ】

2022年度の授業は1年生が新カリキュラム、2・3年生は旧カリキュラムで実施している。今後、新カリキュラムをより良くしていくために、委員の皆様より意見をいただきたい。

【持木看護学科総括主査】

配付資料①に基づき、3の(1)の①「2022年度 カリキュラム評価について」を説明した。配付資料②に基づき、3の(1)の②「2022年度 卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価について」を説明した。

【島田看護学科長】

3の(1)の③「新カリキュラムによる授業・実習の状況について」を口頭説明した。

今年度から1年生に新カリキュラムを始めており、その状況をご報告させていただく。

第5次改定の新カリキュラムは情報通信技術（ICT）の活用、コミュニケーション能力の強化、臨床判断能力、解剖生理学等の内容を充実、「地域・在宅看護論」に名称変更し、より地域での健康生活をイメージできるなどが改定のポイントであった。

当校では解剖生理学を、外部講師の他に専任教員が形態機能学として講義を実施した。さらに、その教員がフィジカルアセスメントと症状別看護も担当し、学んだ解剖生理学の知識を看護でどうやって活用すればいいのか、看護師がどのように予測してどのように動くのか、看護の思考をつなげられるよう工夫した。並行して、疾病と治療を開講し、根拠を考えながら看護実践を考えられるよう工夫した。

結果、カリキュラム評価にあったように定期試験結果が、解剖生理学、疾病と治療とも昨年度と比較して上昇している。

また、はじめての実習を地域在宅実習とし、看護の対象を地域で生活する人、をイメージできるように工夫した。施設等の調整を学生チームで行い、コミュニケーションやチームワーク、リーダーシップなど実践に活かされる仕組みづくりを行った。

旧カリキュラムでは、病院での実習を実施すると、患者のそばに行かないで情報収集をカルテで行っている姿が見られ気になっていたが、1月に行われた基礎看護学Ⅰ実習では積極的にベッドサイドに出向いていた。物おじせず質問や相談ができていたなど、教員からの感想を聞いている。

2023年度は、さらに、1年次に身につけた知識や技術、態度が反復して身につくよう、領域を超えた横断的な健康段階別の授業や実習を計画している。第二外国語では「英語村」に行き英語しか話せない環境に身を置き、英語能力だけでなくコミュニケーション技術も培う計画している。学生の看護実践能力を育めるよう、講義や実習などで気づきや疑問を持てるような仕掛け、自律して効果的に学習できるような工夫を実施したい。

以上の説明ののち、以下の意見交換があった。

ア シミュレーションルームの活用について質疑応答

【伊藤委員】

シミュレーションルームを活用し学習している学生は何割ほどいるのか。

【島田看護学科長】

アンケートをとると7割ほどが、明確な目標をもち実践に向けて活用している。今後もシミュレーションルームでの練習を励行するよう指導していきたい。

【伊藤委員】

残り3割の使わない学生をどうするかが課題である。実習で学んだ技術を厚手のシミュレーションルームで復習し、レベル高い技術を身につけてほしい。

イ 新カリキュラムによる授業・実習の状況について質疑応答

【神保委員】

新カリキュラムの授業・実習では、解剖生理学の取り組みの説明を受けたが、大変な取り組みである。特に苦勞した点があれば教えてほしい。

【島田看護学科長】

1年次に「解剖生理学Ⅰ」、2年次に「解剖生理学Ⅱ」を履修する。それに対して「疾病と治療（呼吸器）」が2年次に履修される。呼吸器を理解しなければ「解剖生理学Ⅰ」や「疾病と治療」の他の科目が理解できないかと心配した。

【武藤学校長】

「解剖生理学」を理解しないまま「疾病と治療」を1年次に履修して理解できるか心配したが、思ったよりやれている。疾病と治療の授業で異常を理解できることで、解剖生理学に興味を湧くようである。

【吉村委員】

解剖生理学は、医師が講義しそれを座学で聞いて覚えるだけのイメージがあるが、看護師の専任教員が形態機能学の講義を実施し、さらにフィジカルアセスメント、症状別看護を担当することで、解剖生理学の知識を看護で活用する視点がつきやすくなるのだろう。

【三宅委員】

解剖生理学を理解して、それから疾病と治療につなげるには、すごく労力が必要である。よくここまで構築したなと感心する。

【武藤学校長】

1年次の夏に「地域・在宅介護論実習」の成果を発表し、学生間で共有し、その後基礎看護学の履修に入っている。

【神保委員】

病院実習では入院から退院までの流れで終わるため、地域に戻ってからどう支援するかのイメージがつかない学生さんもいたと思う。病院での治療から地域での支援への切り替えには苦勞するのではないか。

【島田看護学科長】

臨地実習と地域での支援の切り替えは難しかった。地域で生活者を見てから臨地実習に行くほうがスムーズに理解できると感じている。今後は臨地で関わり方を学んでほしい。

【伊藤委員】

小児の場合は、地域の生活を学んでから、病棟で実習する流れが普通であるが、成人の場合は何故か逆である。

【吉村委員】

1年次から地域実習するといっても、地域実習先の種類は多岐に渡る。地域実習は1か所しかいかれないと思うがどうするのか。

【持木総括主査】

1か所だけ地域実習に行くが、それを学生全体で発表会を行いプレゼンテーションする。学生同士で共有し、地域において様々な種類の疾病を抱えている生活者状況を知ることとなる。

【三宅委員】

それは我々医療者全体の課題でもある。

【武藤学校長】

2年次の小児看護学実習では、保育所だけでなく小・中学校にも範囲を広げる予定である。

【島田学科長】

学生たちは、地域の生活者状況を理解するための計画を立てて実習に行くが、その計画と実状が異なるとき、納得できない『固さ』があり、思いが強すぎることもあれば、患者に合わせられる学生もいる。

【武藤学校長】

学生は地域に実際に実習に行き、障害を持っていながらも自立した生活のできる生活者としての強さを理解できたようだ。

【三宅委員】

パラリンピックに出場できるほどではないが、障害をもっているもしっかりと自立している生活者は地域に数多くいる。

ウ 卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価について質疑応答

【武藤学校長】

技術到達度評価について、今年度はかなり良い数値結果であった。ただし、実践的に対応できる技術が身についているかどうか分からない。

【北野委員】

なぜ尿検体の取扱いが到達度として課題になるのか疑問である。

【持木総括主査】

実習において採尿の機会があまりなかった。今回は、採尿する場面を実際にみることができ、その場面で教えてくれたおかげで到達度の上昇が図れた。

エ 全般的な質疑応答

【梅澤委員】

コロナ禍のおかげと言ってよいのか。高等学校教育でも得たものは多かった。おかげでICT化が図れた。今後はウィズコロナという対応が分かったうえで、対面とオンラインの取捨選択ができる。もっとオンラインの進むべきところと戻るべきところを分ける部分ができるようになった。このことはインターンシップ制度の普及にも似たところがある。現業系課程はオンラインでは身につかないと言われているが、座学授業でもオンラインでは身につかないところもある。ICTが整備され、来年度以降の取り組みが楽しみである。

【武藤学校長】

この度卒業した学生たちは、入学後すぐに休校になり、白衣を着て演習する機会が遅れた。臨地実習に行かれない分、行かれる時間は大切にしていた。

【梅澤委員】

そういう経験も良いのかもしれない。

【武藤学校長】

在籍中の3年間、マスクもずっと着けたままだった。国家試験も間際まで感染しないよう緊張していた。昨年度もそうであったが、最終的に3年卒業生全員が受験できた。

【神保委員】

コロナ禍でも国試に休まないよう健康管理をしたことは偉いと思う。入職後も1人前になるようしっかりサポートする。

【伊藤委員】

コロナ禍で校外実習が少なめと思うと、卒業・入職後に患者さんとコミュニケーションをとれるのか心配したが、実際はしっかりコミュニケーションが取れている。ウィズコロナに対応していかなければならないけれど、サポートして行きたい。

【武藤学校長】

4月からマスクを外してよいのかどうか。看護学校としては病院に実習に行くので慎重に、かつ快適に過ごしてもらいたいと考えている。卒業式はマスクを外してよいとしたものの、殆どの学生は外さなかった。学生は皆まじめで心配なところもある

【梅澤委員】

学生には優しくすれば良いわけではない。授業料が高くなっても悪いことではない。明るいカラーを持ちながら10年20年たってもポリシーは変わらず、締めるところは締める必要があると思う。

3の(2) その他「2023年度4月入学生からの『ダブルスクール制度』の導入について」

【五十嵐副学校長】

4のその他である「2023年度4月入学生からの『ダブルスクール制度』の導入について」口頭で説明した。

ダブルスクール制度に参加する入学生は6人。放送大学への入学手続きを済ませたとこ

ろである。なお、7月に開催した当教育課程編成委員会で説明した内容と変更した点がある。

卒業後、残り8単位(4科目)受講すれば教養学士を取得できる制度であったところを、看護学士の取得を目指すルートに変更した。この場合、卒業後、残り32単位(16科目)を取得しなければならないが、そのことを説明した6人の入学生は看護学士取得を目指す決意を示している。当校のダブルスクール第1期生として、今後支援していく。

以上の説明ののち、以下の意見交換があった。

【三宅委員】

就職先のシフトに配慮がないと、残り32単位16科目の取得は難しい。就職先にも協力をお願いしていかなければならないかもしれない。

【五十嵐副学校長】

卒後7月の放送大学試験に向けて、3月に卒業しその後就職までの間に当校で勉強してもらい、教養学士に必要な8科目のクリアを目指してもらおうと考えている。その後1年で無理でも2年かけて、取得できるまで支援したい。

【神保委員】

卒後7月の試験までの間は、年休も少ない。支援していかないといけないと考えている。

以上